

りそういう要因が作用することによって群集の個性性が保持されてきたと考えることができる。ミヤマキンボウゲ=シナノキンバイ群集では北方系が主であるが、満鮮系や中国、ヒマラヤ系の存在も無視できない。このことは非常に興味深く思われる。

以下それぞれの問題について考察してみたい。

(続く)

薩摩に見出された珍奇なスミレの雑種

神山隆之・浜 栄助

T. Kamiyama and E. Hama : A new hybrid of *Viola* from Kagoshima Prefecture

は じ め に

筆者の一人、神山は、昭和47年5月3～8日の日程で、友人高村晴元のラン科植物調査に同行し、鹿児島県出水山地及び高隅山地のスミレ属を調査した。全般的には花期が遅かったが、ニョイスミレ、アギスミレ、ツクシスミレ、タチツボスミレ、コタチツボスミレ、ナガバナタチツボスミレ、マダラナガバナタチツボスミレ、ニオイタチツボスミレ、スミレ、ケナシノジスミレ、コスミレ、アカネスミレ、オカスミレ、フモトスミレ、ヒメミヤマスミレの諸型、コミヤマスミレなどがみられ、九州南部のスミレ相を概略把握することができた。特にツクシスミレの群落は、神山にとって最初の体験であり、興味をひかれたが、更にそのツクシスミレ群落の中に珍妙なものを見出した。場所は、薩摩郡鶴田町紫尾温泉付近であるが、形態上からもまた、付近にニョイスミレの花盛りのものがあることから、どうみてもツクシスミレ *Viola diffusa* Gingins (n=12 : 橋本) とニョイスミレ *Viola verecunda* A. Gray (n=12) の雑種としか考えられないスミレが、道路ぞいの湿り気のある場所に約15個体位生育しており、地上莖が出ず花のつかない若い株から何本もの地上莖が匍匐状にひろがっている花期の終わりの株まで、いろいろな個体がみられた。

浜は神山から送られた生品を培養し、本年3月まで約1ケ年の観察をした結果、これがツクシスミレとニョイスミレの雑種に間違いのないと同定し、両者相談のうえ、神山の発意により、サツマスミレ *Viola diffusa* × *verecunda* の名をあたえることにした。(図1, 2・図版Ⅱ)

サツマスミレとその両親の比較

次に、神山・浜両者の観察結果をもとに、サツマスミレとその両親の、三者の主な特徴を表記してみる。

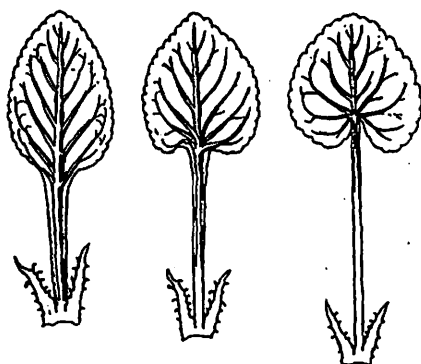


図1. スミレ三者の葉

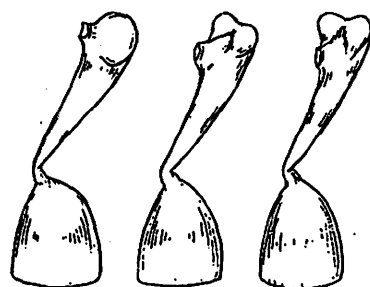


図2. スミレ三者の雌蕊

左より ツクシスミレ サツマスミレ ニョイスミレ

左より ツクシスミレ サツマスミレ ニョイスミレ

		ツクシスミレ	サツマスミレ	ニョイスミレ
茎	地下茎	短い。根はややかたく、じくじく状で数が多い。	ニョイスミレのように、古いものではワサビ状の根茎が太くなる。根はツクシスミレ状に、ややかたく、じくじく状になる。	古いものでは太くて長くワサビの根茎状。ひげ根状の根を多数出す。
	地上茎	地表をはう匍枝となって長くのび、先端部が立ちあがり、葉がむらがる。土質や水分の条件がよいと、むらかった部分から発根し、新株をつくる。白色の粗毛がある。	ツクシスミレに似るが、両親よりも茎が太い。 有毛であるがツクシスミレよりは少ない。	茎は細く軟弱で、花後は倒れるものが多い。倒れた茎から発根して増殖するものもある。茎の先端に葉がむらがるものもある。 無毛。
葉	形	卵状～円形～だ円形で、基部は葉柄にむかって翼がくさび形に流れ、全体として、しゃもじ形をしている。	長卵状～心臓形～円状～心臓形で、両親の中間形。基部はツクシスミレの性質をうけ、中心部が翼になり、少し流れる。	腎臓状～心臓形～卵状～心臓形、または三角状～心臓形で無翼。
	大きさ	長さ1.5～4cm、巾0.8～2cm位。	長さ1.5～3.5cm、巾1.2～4cm位。	長さ、巾とも1～3cm。
	毛	表面には白色のやや長い毛が多く、裏面は無毛かいくらか有毛。	表面にはツクシスミレ状の毛があり、裏面は少なく、脈上にやや多い。	両面無毛か、またはいくらか短毛がある。
	たく葉(葉生)	ヘリに縁毛がある。	ニョイスミレのように、1, 2のきょ歯のあるものもある。	緑色葉状で、ほとんど全縁か、1, 2の鋭きょ歯がある。
花	花期	ニョイスミレより早い。	両親の中間。	ツクシスミレより遅い。
	花冠	上弁がそりかえり、横に長く見えるものが多い、花弁はまとまって咲く。しん弁がやや短い。径0.8～1.4cm。	両親の中間形で、上弁がそりかえり、横に長く見え、しん弁が短い。径0.9～1.2cm。	上弁がそりかえり、横に長く見えるものが多い。しん弁はやや短い。径0.7～1.4cm。
	色	白色に近い淡赤紫色～紫赤色で、花弁の裏面は白色。	淡紫赤色であるが、色の淡いものもある。裏面は白色に近い。	白色であるが、時に淡紫赤色をおびるものがある。
	花弁内面の毛	各弁の内面は無毛。	各弁の内面に短毛がある。	側弁は少し有毛。上弁の主に基部に毛のあるものもある。
	距	短い袋状で淡緑色。	両親と同じ。	短い袋状で淡緑色。
	花柱上部	葯の頭のように丸いか、上部がやや三角状になった頭状。	ニョイスミレ状の立えり形、単立えり形のほか、単虫頭形もある。	立えり形で、短いえり状部が両側と後部に立たり、中央部が陥没している。
	果実	長さ5mm位、円頭か頭の中央がへこむ長だ円形。種子は黄褐色～黒褐色。	すべて不稔。	長さ6～8mm、鋭頭皮針形。種子は黒褐色～黒色。
	がく	がく片全体に毛がある。付属体はほぼ円形、全縁で縁毛がある。	がく片の基部の方3分の1位に毛がある。付属体はほぼ方形で縁毛がいくらかある。	がく片は無毛。付属体は円頭で全縁、縁毛はない。

ま と め

上記の表から推察できるように、サツマスミレの概観や各部分は、両親の中間形を示しているが、更に大きな特徴として、地上莖が長く匍枝状にのびてひろがり、その先に節のつまったロゼット状の部分ができ、水湿のある環境にめぐまれば、そこから発根して新株をつくるというツクシスミレの性質が、一層強調されて出ていることが注目される。またこの性質は、サツマスミレに生じる果実が雑種の特性として全く不稔であることにより、更に拍車がかけられているとみるべきであろう。

スミレ属の自然雑種は、多くの先覚者や筆者等により、約60もの多くが見出されているが、このうち、異節間の雑種は極めて珍しく、従来わずかに橋本保により、ニオイスミレ節Sect. NOMINIUMのフオイスミレ *Viola hondoensis* W. Becker et H. Boissieu (n=10) と、タチツボスミレ節Sect. TRIGONOCARPAEのナガハシスミレ *Viola rostrata* Pursh (n=10) の雑種であるキンボウスミレ *Viola × inconcinna* F. Maekawa et Hashimoto が山形県金峯山で見出されているにすぎない。

今回見出されたサツマスミレも、それこそ全く無縁とみられていたツクシスミレ節Sect. DIFFUSAEと、ニオイスミレ節Sect. BILOBATAEとの間の、植物研究者にとっては常識を打破るに足る、興味つきない貴重な雑種である。また、ヒマラヤから中国、台湾、沖縄を経て、九州には帰化的に分布するところの、南方種属であるツクシスミレと、日本中どこでもみられる純日本的な種属であるニオイスミレとの混血という意味においても、誠に愉快な個体であるといえることができる。

昨年、長野県小県郡丸子町の望月精一は、浜の送ったツクシスミレと、フイリゲンジスミレ *Viola variegata* Fisher ex Gingins var. *variegata* (n=12) という、有莖種対無莖種の、これまた常識をこえたスミレ間の人工交配に成功し、目下、浜の手元で立派に開花を見せているが、今後もスミレ属の中に、こうした異節間の自然雑種や人工雑種が次々と出現する可能性が考えられ、大きくは植物の進化の追求に貢献できる貴重な資料になることと思われる。

この報告をまとめるにあたり、助言をいただいた東大付属植物園日光分園の久保田秀夫氏および、採集にあたって直接お世話をおかけした同行者、高村晴元氏に心から感謝の意を表したい。

主 要 参 考 文 献

- | | |
|----------------------|-------------|
| 浜 栄 助 (1962) | スミレ属の柱頭形 |
| 前 川 文 夫・橋 本 保 (1963) | 日本のスミレ |
| 大 井 次三郎 (1965) | 日本植物誌 |
| 井 波 一 雄 (1966) | 日本スミレ図譜 |
| 橋 本 保 (1967) | 日本のスミレ |
| 村 井 久 (1969) | 続・日本のスミレ拾遺集 |